

---

# For Your Love

きんぐ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F o r Y o u r L o v e

### 【Nコード】

N 6 3 7 2 D

### 【作者名】

きんぐ

### 【あらすじ】

卒業とともに卒業する。私はたくさんの思いを胸に・・・

あなたは、

いつも冷たくて、

氷のようだった。

いつも冷静で、

頭が良くて、

私とは全然違う。

選ぶ道も違ったんだ。

だから、

高校も違うんだよね。

あと何時間の恋なんだろう・・・

あなたに恋をして、

私、間違っていたのかな？

でも、私は、

あなたに恋をして間違っていないって

そう思ってるから。

だから、

今日の1日、

精一杯恋させてね。

2008年3月11日

神田中学校卒業式

3年間通ったこの学校との別れ。

私は、いろいろな思いを胸に、今この場所にいる。

中学の3年間は、あつという間だった。

喧嘩、恋愛、友情、団結、そして別れと出会い。

全部が良いものだったとは限らない。中には、最悪な事もあった。

人生に迷いを感じたことも。

でも、それでも良いと思っているのが今の私。

これは、やっぱり充実していたということがあったからなのだろうか。

それとも・・・

やっぱり、あなたの存在があったから？

私は、今日ある決意をしている。

中学校卒業とともに、

あなたへの恋も

卒業する。

恋人同士になれなかったからではない。

道が違うからでもない。

けじめを付けたいから。

そういつたら、逃げて聞こえるのかも知れない。

でも、後悔はしたくない。

もういいんだ。

それで、あなたが満足なら。

どうせ、私はあなたに迷惑ばかり掛けていた。

だから、

今日限りで、もつやめます。

私は、

あなたのことが好きです。

大好きです。

後ろ姿も、横顔も、  
笑い顔も。

怒った顔はあまり好きじゃないけど。。。。

でも、全てが好きだった。



みんなには反対された。

「あんなのが良いの？」

「あれは無いだろ！」

色々言われた。

それでも、私は好きだった。

あなたは1組、私は4組。

だから、体育館に座ってる今、

私はあなたの後ろ姿しか見えない。

あなたの背中が、いつになく寂しそう。

私は、今にも泣きそう。

あなたが寂しくなると、私もきつと寂しくなる。

あなたの名前、格好良かった。

あなたの担任が、

「飯島 直樹」

と呼んだ後のあなたの

「はい」

という返事、

これからずっと耳に残るようにしておきたい。

私は卒業証書をもらい、

座席に着いた後、

あることを思い出していた。

そう、これは、もう1年半も前のこと。

あなたと出会ったときのこと。

私があなたに恋をしたのは、中学2年のとき。私は体操部。あなたは剣道部。初めて同じクラスになって、理科のグループが同じだった。

はじめの頃は、あまり仲が良くなくて、喧嘩もしていたほどだった。

あなたが

「おい、実験用具もってこいよ」というと、

「知らん！お前が持ってこい！」

「は？誰に向かっていってんだよ」

「お前だよ！」

「・・・ムカツク」

「死ね～～～」

こんな会話しかなかった。  
最初は嫌いだったから。

2006年9月27日

新人大会

私は、この日は大会じゃなかった。でも、あなたは大会に行った。神田中があなたの試合会場。放課後、私が部活をやっているとき、剣道着を着たあなたが現れた。いつもとは違う姿で、少しかっこいいな、と思っていた。

9月28日

## 新人大会2日目

あなたはこの日、学校にいた。私も学校にいた。人が少ないと言うこともあり、よく話した。少しずつ惹かれていったんだ。理科の時間、ワークを出そうか出さないか迷っていた私のノートを、あなたが変わりに出してくれた。これがきっかけで、私はあなたに恋をした。

きっかけがちつぽけすぎて、私はこの話を誰にも言っていない。

また、馬鹿にされるだけだから。この日を境に、意識しはじめたのか、顔を合わせることすら恥ずかしくなってきた。あなたは、それを知らずに話しかけてくる。

「昨日のドラマみた？」

「うん。」

「昨日、何時に寝た？」

「10時かな」

「何かあったの？」

「別に」

「変だよ」

「前からだよ」

「ふうん」

こんな会話しか出来無くなっちゃうんだ。

でも、こんな恋はすぐ終わるだろう。きっと、また違う人に移り変わるだろう。

そう思っていた。

でも、

違ったんだ。日が経つにつれて比例するかのように気持ちは高くなる。そして、比例するかのように私の態度もおかしくなっていく。ある日、本橋という男子が、あなたの電話番号を私に教えてきた。

「好きなんでしょ？メールしなよ」

すごく恥ずかしかったけど、凄く嬉しかった。

早速メールを送った。

「2年3組の前田エリカだよ！本橋に聞いちゃった〜！」

来ない・・・やっぱり送らない方が良かったのかな。

・・・ブーンブーンブーン

バイブだった。

あっ！来た！

「わかった。登録しとくよ。でも、あんまりメール送らない方がいいよ」

「何で？」

「返事早いすね」

「そうかな」

「うん、そうだよ。」

「普通だよ」

「ふーん。もうメール送らないでください」

・・・凄くショックだった。

好きな人じゃなかったとしても、この一言はかなり傷つく。それが好きな人からだと更にその傷は深い。

もうメールするのやめよう・・・

でも、学校で話さない分、メールで補いたいと思ったんだ。だから、メールはした。

だんだん慣れてくれたのか、あなたも普通に返してくれるようになった。

ある日には、

「明日ヒマ？」

と来て、

「何で？」

と答えると、

「遊ぼうかな？みたいな」

ときた。でも、私は部活があつたから

「ごめん！明日は午後から部活だわ」と返していた。

何度かあったけど、  
都合が合わなかった。

結局1回も遊ばなかったんだ。

2006年12月末

私は、あなたに告白した。電話だと恥ずかしいし、冬休み中だったから直接は無理だったから、メールにした。

「今、メールできる？」

「出来るよ」

「寒いね」

「明日からスキー行くんだ」

「うちも来週行くよ！」

「そうなんだー！」

「てか、こんな時に言うのもどうかと思うんだけど」

「何？」

「あのさー、うち、飯島のことすきだったんだよね」

送っているときは、そんなに緊張していなかった。でも、送り終わった後、ものすごく緊張した。

「ありがとう！」

「いえ・・・別に・・・」

「良く言う勇氣あったね！」

「凄い緊張した！」

「で、どうします？」

「えっ？」

「だからどうするの？」

「うち、ふられてるの？」

「まだ俺返事出してないけど。」

「返事お願いします。」

「今は、返事出せません。てか、返事出したところで何があるの？」  
・・・はっ？

こいつ、何言ってるの？  
意味が分からなかった。

そして、すぐにあなたからのメールが届いた。

「返事は今度会ったときにでも出すよ。」

はあああ。

もう終わった・・・。

親友の真美に相談したところ、真美はあなたからの相談も受けていたらしい。

2007年1月

あなたからの返事をもらった。

「まだお互いのこと良く知り合っていないからお友達からね」

あっさりふられてんじゃん！

でも、諦められなかった。まだ好きだった。  
あれからあまり話す機会はなくなっただけ、  
好きでいることに変わりはなかった。

2007年4月

私は晴れて3年生に進級した。

始業式の朝、昇降口に貼ってある新しいクラス表を見に行った。



自分の名前を探すよりも先に、あなたの名前を探していた。飯島・

・飯島・・・

「飯島 直樹」

あった！

あなたのクラスは、1組だった。あなたは、飯島だから、前田の私よりも出席番号が早い。

同じクラスになっている期待を胸に、その下に私の名前があるかを確認した。

・・・・・・・・・無い。

前田・・・前田・・・

「前田 エリカ」

・・・・・・・・・4組・・・

涙が出そうだった。

クラスが離れた。

学校では泣かないようにして、家に帰って泣いた。泣きたい分だけ泣いた。

メールはたくさんしたし、話す機会も増えたが、接点はかなり減った。

クラスが離れればこのぐらいだろう。

でも、私は嫉妬しまくった。  
仲良くしている女子がいたら、ヤキモチを焼いていた。

合唱コンクール、あなたは私とは違う歌を、違う人たちと歌っていた。凄く悲しくて、泣いていた。

そして、もう気がつけば入試が近い2008年1月。

私は、私立高校は自分のレベルにあった学校と、少し低い学校と少しレベルの高い学校を受験した。

あなたは、和士の受けた学校とかぶっていなかった。  
もっと頭の良い学校と、日本の名門校と、あなたにとってはかなりレベルの低い学校だった。

私は、3校無事に合格することが出来た。  
あなたもきつと合格したでしょう。

あなたは秘密主義だから、何も分からない

ただひとつ、県立高校も志望校が違うこと。

私はR高校。

あなたはT高校。

私は、推薦をもらっていた。

あなたは一般で行くと言っていた。

志望校が違うのを知ったときも私は泣いた。

最近涙腺が弱くなってきた。

4月からは、あなたと私はクラスが離れるどころか、生活する環境すら変わってしまう。

あなたが誰と仲良くして、誰に恋をして、誰と恋人になって、誰と喧嘩するのか……。

何もかも分からなくなってしまう

でも、もう見えない。

あなたの姿は見えないから、嫉妬することも、怒ることもない。

私だって、誰かに恋をして、幸せな高校生ライフも満喫しているかも知れない。

人生なんてそんなもん。

いつかは、あなたのことが好きだったことすら忘れちゃう日が来るかも知れないでしょ。

だから、前に進まなきゃいけないんだ。

気がつけば、卒業証書授与はおわっていた。

P T A 会長の話やら、校長の話、祝電披露とか、凄く長いことももう終わっていた。

生徒会長の話が終わり、卒業生代表あいさつになっていた。

元生徒会会長が代表であいさつをした。

言葉の一つ一つが心に染みた。

仰げば尊し

我が師の恩

教えの庭にも

早幾とせ

思えばいと年

この年月

今こそ別れめ

いざさらば

仰げば尊しとは、  
こんな感動する歌詞だったとは、  
今になるまで気がつかなかった。

そして、卒業生が学年で歌う、  
「旅立ちの日に」

白い光の中に  
山並みは萌えて  
遙かな空の果てまでも  
君は飛び立つ  
限りなく碧い  
空に心ふるわせ  
自由を掛ける鳥よ  
振り返ることもせず  
勇気を翼に込めて  
希望の風に乗り  
この広い大空に  
夢を託して

懐かしいとも  
ふとよみがえる  
いみもないいさかいに  
泣いたあのとき  
心通った  
嬉しさに抱き合った日よ  
みんな過ぎたけれど  
思い出強く抱いて  
勇気を翼に込めて  
希望の風に乗り  
この広い大空に  
夢を託して

今、別れの時  
飛び立とう  
未来信じて  
弾む若い力信じて  
この広い大空に  
今、別れの時  
飛び立とう  
未来信じて  
弾む若い力信じて  
この広い大空に

泣ける。かなり泣ける。会場にすすり泣く声と、ピアノの最後の響き。

私たちは、3年間の締めをこんな形で閉めた。

凄く清々しかった。

良かった。

これで良かったんだ。

もう悔いはないんだ。

この涙は、悲しいんじゃないんだ。

嬉しいんだ。ここまで来れたことに喜んでるんだ。

私がやり残したこと。

あなたにお礼を言わなきゃ。

最後の学級活動が終わった後、

私はあなたのことを待っていた。

「ねえ！」

「あゝびっくりした」

「ちよつと話せる？」

「いいよ。」

「あのさ、」

「こっちいかない？」

「うん・・・」  
「卒業しちゃったんだね」  
「だね、早かった!」  
「だね!もう高校生だよ」  
「で、話って何?」  
「あつ・・・あのさ、」  
「うん」  
「今まで・・・ありがと」  
「うん」  
「何かさ、違うんだよね」  
「うん」  
「本当に好きだったよ」  
「うん」  
「でもさ、これ以上好きでいても先に進めないと思うんだ」  
「うん・・・」  
「だからね、もうこの気持ちは今日までにするから」  
「うん・・・」  
「飯島には、めいわくばっか掛けてたけど・・・」  
「うん・・・」  
「何でうんしか言わないの?」  
「うん・・・」  
「聞いてる?」  
「うん・・・」  
「もういいし!じゃあね!」  
「待ってよ!」  
「・・・何?」  
「ここでは止めないで欲しかった。  
涙が出そうになったから。」  
「泣きたいときは泣いて良いって教えてくれたの、お前だから」  
「えっ?」



「だからー！泣きたいんでしょ！泣きなよ」

「嫌だ・・・」

「強がり・・・」

「うるさい！」

・・・沈黙が続いた。

「俺も・・・」

よく聞き取れなかった。

「え？」

「だから！俺も、楽しかった」

私には、告白よりも嬉しい言葉だった。

これで、安心して高校に行ける。

このとき、押さえていた涙が、溢れんばかりに溢れた。

あなたは、涙を拭いてくれた。

ありがとう。

あなたには、この言葉しか掛けません。

あなたに会えたことで、人を好きになる喜びを味わえた。  
あなたに会えたおかげで、嫉妬した、ヤキモチも焼いた。

あなたのことが、好きで本当によかったです！

ありがとう。

好きです。好きです。好きです。好きです。

大好きです。

永遠に  
・  
・

F  
o  
r  
  
Y  
o  
u  
r  
  
L  
o  
v  
e

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6372d/>

---

For Your Love

2011年1月14日04時35分発行